試験研究は今　No. 898

冬の日本海の風物詩「岩ノリ」を増やす

岩ノリとは

冬の日本海沿岸の岩場は寒風が吹き、ウニ漁やアワビ漁といった磯根漁業がお休みとなります。そんな漁業の端境期の、潮が満ちても海水に浸らず、波しぶきを浴びている岩場に岩ノリ（正式名称はウップルイノリ）が生育しています。この岩ノリは北海道沿岸では「どんざのり」あるいは「どんじゃのり」とも呼ばれています。「どんざ」とは、古くに漁師が着ていた労働着のことで、そのゴワゴワした「どんざ」の質感に似ていることから名前が由来したとの説があります。このノリは、本州以南で養殖されてオニギリに巻くノリ（スサビノリ）（図 1 左）と異なり、天然物であるため単価が高く、冬の日本海側の漁家の貴重な収入源になります（図 1 右）。かつての日本海では、天気が良い日に婦人を含む多くの漁家が磯に出て岩ノリを摘む光景が冬の風物詩になっていました。ところが最近は岩ノリの資源量が減少し貴重品となり、この風物詩も幻になりつつあります。特に積丹町美国の神威岬付近の海岸は優良なノリ漁場でしたが、2014 年の冬に大きな時化が来て以来、岩ノリが見られなくなってしまいました。そこで水産試験場に、この岩ノリ増殖の要望が寄せられました。

図 1　食用ノリ類

本州以南で養殖されているスサビノリ（左）と北海道の天然の岩ノリ（右）

暮らしぶり（岩ノリの生活環）

私たちが食べるノリの藻体（正式名称は葉状体）は、冬に人の指程度の大きさに育ち収穫されますが、夏には姿を消します。どこに行っているのでしょうか？ノリは暑さに弱いため、夏に備えて春になると 0.02mmほどの小さな種（正式名称は接合胞子）を出します。これが、貝殻にもぐって糸状体と呼ばれる物になって（図 2）、夏を過ごします。秋になると糸状体は殻胞子と呼ばれる種を出して、これが岩の上で成長して藻体となります。以上が基本的な繁殖方法です。

ノリには２つ目の繁殖方法があります。ノリの藻体は冬には、自分のコピーである中性胞子を出します。この中性胞子は生長が早く、環境条件が良ければ 10 日程で親と同じ大きさに育ち、短期間で岩一面を覆いつくすほどの繁殖力があります。ノリの暮らしぶりは複雑なため、以

図 2　カキの貝殻で培養される岩ノリの糸状体

表面に糸状体が増えてピンク色になった様子（左）、糸状体の顕微鏡写真（右）

降は目に見えないサイズは種と略します。

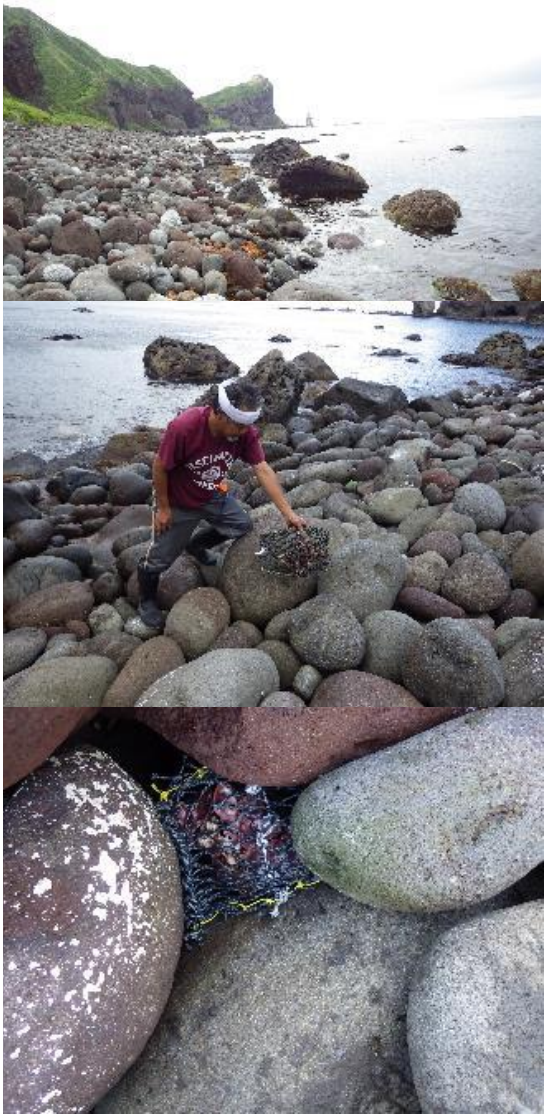

図３　岩ノリ種苗の設置

日本海の積丹町神威岬付近のノリ漁場であった場所（上）、秋季に漁業者自ら種苗を網袋に入れて設置（中）、設置した様子（下）(この写真は 2019 年 11 月のもの）

増やす試み

水産試験場では、積丹町神威岬の海岸の岩ノリが消えた原因は、時化でノリが流されて種の供給が途絶えたことと見ており、回復の方法は岩ノリの種苗を培養して、これを海岸に供給することだと考えました。そこで本州のノリ養殖で確立されている種苗の培養法を導入し、カキ殻に積丹産の岩ノリの種を付けた種苗を、積丹町神威岬付近のノリ漁場であった場所に設置しました（図３上)。

設置は 2018 年 11 月、積丹町美国地区の神威岬の沿岸で、地域の漁業者である東しゃこたん漁協の佐藤正樹さんと共同で行いました（図 3 中)。岩ノリの種が付いたカキ殻の種苗を目合い５ｃｍ程の袋に入れて、流されないように径 30ｃｍ以上の大きさの転石の間に入れ（図３下)、その１か月後には種が放出され終えたと考え、カキ殻を回収しました。

図４　生育した岩ノリ

冬季に種苗設置場所の付近に限り転石の表面を岩ノリが覆い（左)、濃密に生育していた（右）（東しゃこたん漁協　佐藤正樹氏提供）

芽生えた！

翌春 2019 年 3 月には佐藤さんから嬉しい知らせが届きました。カキ殻を入れた場所だけに岩ノリが繁茂したというのです。転石の表面には岩ノリがびっしりと生育しています(図 4)。水産試験場としては、これで予備的な試験は成功したと考え、令和２年度から岩ノリの増殖を正式な事業と位置付けて取り組みます。岩ノリ摘みが積丹の冬の風物詩として復活することを心から願っています。

（2020 年１月 17 日　北海道立総合研究機構　中央水産試験場　資源増殖部　川井唯史）